

支部だより

《静岡県支部》

平成15年度静岡県支部総会・講演会開催

静岡県支部では長谷川会長・川田専務理事・山本学術担当理事の新体制の元、本学より内科学の森實敏夫教授をお迎えして平成15年11月29日(土)の午後より40名余の出席を得て、「歯科診療と全身疾患」と題された森實先生の講演では、1.術前の全身評価、2.救急対応、3.口腔と全身の関係、4.歯科診療と感染予防、5.口腔と全身疾患の関係という、内容豊富なお話が2時間にわたりありました。

健康人を対象とした歯科診療では術前の全身状態は適切な問診で十分であり、運動能力が正常であれば臨床検査の必要性は無く、4ヶ月以内に行われた検査の結果で充分である。

視診だけで診断可能な疾患として、皮膚粘膜の点状出血は血小板の減少で出現し、出血傾向の存在を示唆し、手掌紅斑や皮膚のクモ状血管腫は肝硬変で出現し、間機能低下を示唆する。

薬の関係では鎮痛消炎解熱剤は血小板機能を抑制し、服用中の患者では出血傾向をきたすことがあるそうです。

また、歯科診療ではリスクを伴う処置が多々あり、特に抜歯ではほぼ100%で血中に感染があり、全身疾患と評価したリスクの回避や低減が必要であり、先天性の心疾患や心臓弁膜症の患者では抗菌薬の投与が推奨されており、抗菌薬の投与は抜歯前の1回投与が原則で、現在では数日にわたる従来の処方では推奨されていません。また、糖尿病患者での抜歯時の抗菌薬予防について確立した投与方法は報告されていない。ニフェジピンの舌下投与は急激な血圧低下を起こすので避けなければならない。その一方で欠損歯の数や歯周病など口腔内感染が強いことが虚血性心疾患の危険因子となっている等、我々が必要とされている知識が示され、充実した講演会でありました。

《神奈川県支部》

隣接医学研修会開催



横浜研修センター・横浜クリニックの協力で「歯科医が知っておくべき隣接医学」をテーマに研修

会を開催してきたが、最終回の第四回目は皮膚科の土井希文先生を講師に「アレルギー・検査の実践と意義」の演題で一月二十六日(土)午後六時より行われた。

そもそもアレルギーとは何であるのか?検査には種々あるが、臨床の現場ではどのように実施されどんな意義をもつのか。われわれになじみ深い「金属パッチテスト」を中心に解説された。

新年会開催

平成十五年度新年会が、二月十四日(土)午後七時よりパンパシフィックホテル横浜で開催された。米今豊秀専務理事の司会で、両角旦副会長の開会の辞に続き、小田嶋千里会長の挨拶では、

歯科界の厳しい現実を個人自らが強い信念をもって打開していこうと述べ、また会長として残る半年の任期を全力を尽くして取り組みたいと述べた。来賓として（社）神奈川県歯科医師会大森一昌会長、飯塚喜一学長、本部同窓会井本邦彦副会長からそれぞれ挨拶をいただいた。次いで、鴨居雄三副会長の乾杯の発声で歓談となった。また途中駆けつけた藤田晃本部同窓会会長からも挨拶が述べられた。最後に小野理副会長の閉会の辞で散会した。



《大学支部》

神奈川歯科大学同窓会第33回関東地区連合会 大学支部主催で開催される!!



去る平成16年2月22日（日）に、第33回関東地区連合会が横浜（Hotel Banquets & Restaurants CAMELOT Japan）に於いて開催されました。今連合会は大学支部として初めての主催であり、本部より藤田会長他4名、都県各支部より24名、大学支部より13名の計42名の出席で催されました。

まず、主催者として山村雅章大学支部支部長、次に藤田 晃神奈川歯科大学同窓会会長が挨拶され、引き続きご臨席された各支部役員の方々が紹介されました。その後、各支部より現況が報告され、次いで第66回代議員会協議事項について吉

田耕一（本部）常務理事より各種の説明がなされました。やはり、協議内容の中心は卒業生の未入会者の問題や支部活動の方法論（支部会員への効率的な連絡法等）であり、同窓会会員の獲得や会費徴集についての意見交換が活発になされました。最後に、次回の関東地区連合会開催地区が東京で、東京支部連合会（元田文治会長）の主催で催されることに決定して盛会裡に閉会と相成りました。

その後には同ホテルで懇親会が挙行され、懇親会場では懐かしい昔話に春らしい和やかな風がたくさん舞っておりました。

(((ポイス)))

診療室秘話 I

私事で恐縮ですが…

3月の声を聞くと春の気配が一気に感じられ診療室から見る外の風情にも季節の移ろいを感じる。

路肩には除雪車が掻き集めた雪の固まりが所々残ってはいるものの、それも今では春の陽を受けて日に日に小さくなり、学校帰りの子供達が面白そうに踏みつけている。暖かくなると下校する子供達の声も一段と弾んで、俳人一茶が詠んだ「雪とけて村いっぱいの子供かな」を実感する。

そんなある日、いつもどおり受付に近いユニットで治療をしていたところ治療室と職員更衣室の間仕切りのガラス戸に不鮮明ながら物陰を感じた。別段怪しい事態などと気にすることではなかったが偶然にも患者さんが神経質そうに念入りなうがいを始めた為、私もその待ち時間に更衣室の方へと軽い足取りで行ってみた。するとどうでしょう。いつもは片づいた4つのロッカーは全てドアが開き中身は散乱、一瞬何が起きたか分からなかった。が、扉の前に立ちはだかる男を見つけて、泥棒！と凍り付く自分、そして逃がしてはならない、と指令を出す自分、その交錯の中で捕まえろ、と促す自分を意識しながら白昼の捕物劇がはじまった。

さすが若い男だけに逃げ足が速い。男は私の前を巧にすり抜け勝手口から駐車場へと逃げて行く。男は必死で逃げる。私も必死で追いかける。捕まえたこの手を離してなるものか。男が駐車場を曲がった。植え込みを過ぎた辺りで、捕まえた腕の力が少しずつ抜けていく。あー汗ばんだ手で男を捕まえ続けるのはもう限界だ。あー限界だ。遂に限界だ。賊は植え込みの陰で待っていたもう1人の男と供に逃げ去った。逃がした魚は大きかった。いえ大きいなんて話じゃ収まらない。

それでも平静を取り戻しながら午前中の診療をやっと終えた。

騒然とした更衣室を片付けて、スタッフが自分達の持ち物を点検し終った時、初めて恐怖と無念に圧縮された妙な思いにかられた。そして警察からの一刻も早い犯人逮捕の連絡が入ることを願って、その日の診療を終った。

翌日警察より連絡が入った。当院が通報した直後、路上の不審尋問で2人組みの男が逮捕され、同時に駅前のホテルや総合病院の盗難事件とも犯人が一致したことが分かった。スタッフの現金は戻ってこなかったが白昼のロッカー荒しは無事解決をみた。

若い男達の更正を勿論願ってはいるが、私から予想以上の抵抗を受けた男らは、悪事からの学習とでも言おうか、今後凶器の携帯を覚えたかも知れない。出入り口が一つしかないあの部屋で凶器を振り回していたら、と思うと、すり傷程度で終り犯人も逮捕されたこの度の事件を機に昼間の勝手口の施錠も忘れないようにした。

受難の日、3月5日は暦の上では啓蟄、啓虫すなはち冬ごもりの虫はいでる意、とあった。春うららを目前に「最大の防虫対策は施錠の確認」を再認識した一日だった。

私事で恐縮ですが…

神齒太郎くんより

